

自分の思いや考えを適切に表現することができる児童の育成

－読み手を意識した，ICTを活用する「書くこと」の指導を通して－

利府町立利府小学校 植田 光貴

1 授業づくりに関わる課題

これまで私が行ってきた国語科の「書くこと」の領域における授業では、教科書等に掲載されたモデルとなる文章をただまねして書く活動にとどまることが多かった。目的や種類に応じた文章の書き方を学ぶための参考として示してあるモデル文であるが、内容まで似通った文章を書いて満足してしまう児童も何名か見られた。そのことから、授業を進める中で、児童に自分の思いや考えを伝えようとする意欲付けや、読み手に伝えたいという意識を高めさせることが不十分だったのではないかと感じていた。

また、4年生29名を対象にした意識調査では、「文章をどのように書いたらいいか、分からないことがある」と回答した児童が5割ほどおり、半数の児童は書くことへの苦手意識を持っていた。さらに、「読む相手のことを考えて文章を書いている」と回答した児童は6割にとどまり、読み手を意識して文章を書く習慣が身に付いていない児童もいることが分かった。

2 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

本研究では、「書くこと」の指導の工夫を通して、自分の思いや考えを適切に表現することができる児童の育成を目指す。「自分の思いや考えを適切に表現することができる児童」とは、目的や種類に応じた構成や表現を理解し、進んで書くことができる児童とする。そのために以下の手立てを講じていく。

① 読み手を意識した「書くこと」の指導の工夫

「誰に」「何を」伝えたいのかを明確にさせるためにワークシートを活用する。その後、目的や種類に応じた構成や表現などの工夫について記入させる。また、教材のモデル文以外に教師が作成した例文を提示することで、相手や目的を意識したよりよい表現について児童に考えさせる学習活動を設定する。

② ICTを活用した「書くこと」の指導の工夫

「書くこと」の学習過程で、オンラインアプリケーションの活用場面を検討していく。自分の考えを深める場面では、付箋機能やプレゼンテーションソフトの活用で考えを整理できるようにする。自分の考えを表現・共有する場面では、共同で文章を読み合ったり、編集したりできるという良さを生かし、目的や種類に応じた構成や表現への理解を深めさせる。

(2) 研究の方法

本研究の手立ての有効性を検証するため、4年生を対象に、書く活動の中での構成や記述内容の変化について分析をする。また、事前と事後の意識調査の変容について検証を行う。

3 授業実践 I と考察

(1) 単元について

単元名 「知らせたい出来事を新聞で伝えよう」

本単元は、〔思考力、判断力、表現力等〕のB(1)イを重点指導事項とし、「書く内容の中心を明確にして、文章の構成を考慮することができる」を目標に設定した。言語活動は、「学校や学級で起きた出来事を伝えるため、書く内容の中心を考えて、読み手の興味を引く新聞を作る」とした。

なお、本単元では、アイディアを出し合ったり、交流を通して読み手の立場を意識したりできると考え、4～5人のグループで新聞を作らせた。また、今回は本来不特定多数の人に読んでもらうものである新聞を扱うことから、多くの人に読んでもらうことを想定して活動に取り組みさせた。

(2) 手立てについて

① 読み手を意識した「書くこと」の指導の工夫

まず、題材の設定の段階でワークシートを活用し、自分たちが「何を伝えたいのか」を明確にさせた。図1の児童のように「校外学習に行ったこと」、「(その時に)ネイチャークラフトをしたこと」のどちらが中心となるかを始めに確認させた。

プールに 行ったこと	パン 北館イオン オン	校外学習 ★ 「ネイチャークラフト をしたこと」	カエルが 来たこと	(例)運動会 さいころタワーで 一位	伝えたいこと 記事
				〇〇さん	担当者
いっ ぱい	いっ ぱい	いっ ぱい	いっ ぱい	多く	分量
見出しを大きく 書く。 いっぱいでか か何 をしたを書く。 ネイチャークラフトをした ことを書く。 はじめて					分かりやすく伝えるための工夫

図1 児童のワークシート（一部抜粋）

次に、構成の検討の段階では、新聞独自の表現を学習し、書く内容の中心を明確にするための構成の工夫について児童に記入させた。

② ICTを活用した「書くこと」の指導の工夫

クラウド型のプレゼンテーションソフトを活用して下書きの前に構成メモの作成に取り組ませた。その意図は、次の二点である。一つ目は、修正が容易にできることである。言葉や文章の修正をしたり、事柄の順序を変更したりしながら、児童は文章の構成について考えていた。二つ目は、グループ内での共有がしやすいことである。クラウド上で作成した友達のスライドをグループ全員で見合い、必要な事柄が抜け落ちていないか、順序は分かりやすくなっているか、見出しの言葉は興味を引くものとなっているかという観点で児童は話し合っていた。

図2から図4の四角で囲んだ部分の変容は、「ネイチャークラフトをした」ことを伝えたい児童が、友達から「(伝えたいことを中心である) ネイチャークラフトをしたことを始めに書いたほうがよい」と順序の入れ替えを助言され、スライド上で修正した様子を表している。また、丸で囲んだ部分のように、見出しの言葉についても興味を引くものとなるように、話し合いを通して何度も修正を重ねる様子が見られた。

見出し 4年生のみんなが 県民の森でネイチャークラフトをしたよ!	6月2日に	利府小学校の
4年生のみんなが 県民の森に行った	ネイチャークラフト をしました	木の枝で作る 剣のクラフトが 人気でした

図2 グループで話し合う前の児童の構成メモ

見出し 県民の森でネイチャークラフト	6月2日に	利府小学校の 4年生が
ネイチャークラフト をしました	木の枝で作る 剣のクラフトが 人気でした	

図3 グループで話し合った後の児童の構成メモ

図4 完成した新聞の見出しと冒頭部分

(3) 授業実践 I の成果と課題 (○成果, ●課題)

① 読み手を意識した「書くこと」の指導の工夫

- ワークシートの活用により、単元を通して児童は伝えたいことを中心を意識したり、構成の工夫を考えたりしながら新聞作りに取り組んでいた。
- 読み手の対象を限定しなかったため、「誰に」伝えるかの意識付けが弱くなってしまい、書くことへの意欲付けがやや不十分であった。

② ICTを活用した「書くこと」の指導の工夫

- プレゼンテーションソフトの活用について、「(大事な事柄である) いつ、どこで、誰が、どうした分かりやすかった」、「メモがしやすかった」と児童からは好意的な意見が挙げられた。
- 授業の中で、児童に文章構成の工夫を考えさせる場面とスライドを作成する場面があり、時間が足りなくなりました。単元構成を作成する際に、ICTの活用をどの場面に取り入れるかを十分に検討する必要があった。

4 授業実践 II と考察

(1) 単元について

単元名 「自分のおすすめの場所を伝えよう」

本単元は、[思考力、判断力、表現力等]のB(1)ウを重点指導事項とし、「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる」を目標に設定した。言語活動は、「自分がお薦めしたい場所について、その魅力を伝えるリーフレットを作る」とした。

本単元では、授業実践 I の課題を受け、読み手を具体的に学級の友達と設定し、お薦めの場所の魅力を伝えるという目的でリーフレット作りに取り組ませた。

(2) 手立てについて

① 読み手を意識した「書くこと」の指導の工夫

題材の設定の段階では、ワークシートを活用し、自分がお薦めしたい場所とその理由を明確にさせた。その際、図5の児童のように複数の理由が出た場合は一つか二つに絞らせた。

図5 児童のワークシート（一部抜粋）

記述の段階では、作成した下書きを友達と読み合わせ、薦める理由を明確にして、具体的な事例を挙げて書くことができているかを確認させる活動を行った。ここでは、始めに教師が作成した理由と事例の挙げ方が不十分な例（図6）を提示し、下書きを読み合う際の観点を確かめさせた。

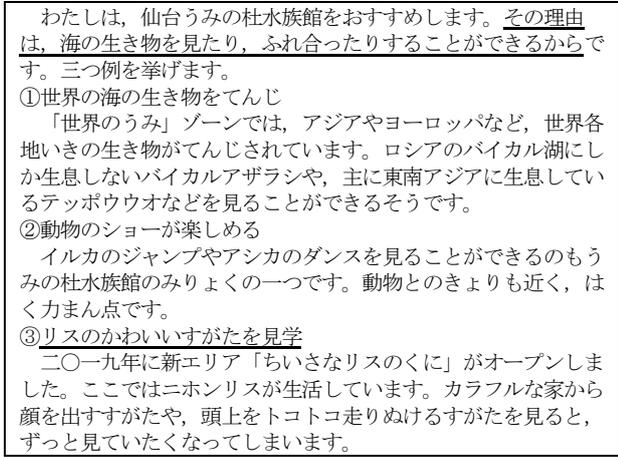


図6 授業で提示した、理由と事例の挙げ方が不十分な例

下線部の「海の生き物を見ることができるから」という理由に対し、児童からは「事例で海の生き物ではないリスを取り挙げているのはおかしい」という反応があった。さらに、「リスの事例を変えるとよい」、「理由の部分を変えるとよい」など、より良い文章にする方法を考える姿も見られた。

図7は児童館を「お薦めの場所」として紹介した児童の下書きである。理由として「いろいろな本が読めたりカードゲームで遊んだりできるから」と述べていたが、挙げている事例が「生き物がたくさんいる」となっていた。そこで、友達から「カードゲームの紹介ではなく、生き物がいることを例に挙げている」と指摘を受け、図8のようにリーフレットでは理由の部分の修正を行っている。

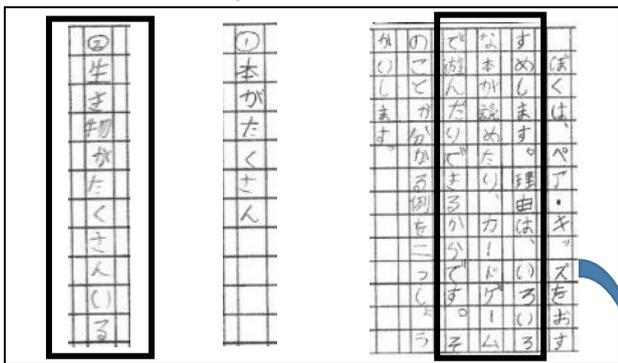


図7 児童の下書き（理由を述べた部分とその事例の見出し）

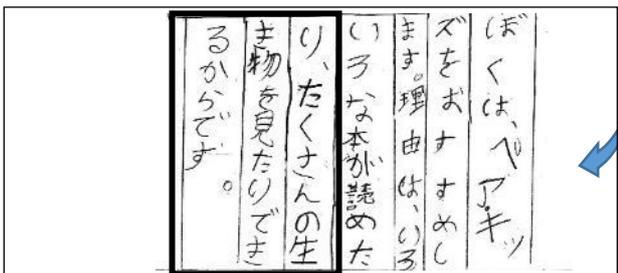


図8 下書きを修正した後のリーフレットの表紙（一部抜粋）

② ICTを活用した「書くこと」の指導の工夫

記述や推敲の場面では、学級の児童が共有できるクラウド上に、タブレット端末で撮影をした下書きやリーフレットを保存し、互いに読み合うことができるようにした。その際にコメント機能を活用し、読み手にとってその場所に行ってみたいと思えるような理由や事例を挙げられているかについて、フィードバックがもらえるようにした。

今回のICT活用の利点として、一つ目は待ち時間なく、個人差にも対応しながら同時に作業ができることが挙げられる。そして、二つ目は撮影をした下書きや修正後の文章を学習の記録として活用させることで、文章の変容の様子を児童自身が振り返り、確認できることである。

(3) 授業実践Ⅱの成果と課題（○成果、●課題）

① 読み手を意識した「書くこと」の指導の工夫

○ 教師が例文を提示したことにより、児童は見通しや必要感を持って学習課題に取り組むことができていた。リーフレット完成後の児童の学習感想には「理由に沿って事例を書けた」、「事例を分かりやすく書いてよかった」などの記述が見られた。

● 提示する例文の内容について、多くの児童がもっと分かりやすく気付けるものにしたたり、分量を精選したりするなど、児童の実態や学習のねらいに合わせて十分に検討をする必要があると感じた。

② ICTを活用した「書くこと」の指導の工夫

○ 共有ドライブやコメント機能を活用したことで、記入された意見についても、学級全体で共有することが可能となった。

○ 下書きや清書したリーフレットを画像データとしてクラウド上に保存させたことで、児童に自分の文章の変容を捉えさせることができた。児童からは「言葉（文言）を変えたところが分かりやすかった」という声が聞かれた。

● コメント入力による文字言語の交流では、児童の集中力が文字入力に向けられてしまったり、作業時間の確保が必要になったりと課題が残った。

5 まとめ

(1) 授業実践後の児童の変容

① 授業実践Ⅰを終えて

授業実践Ⅱの前に、授業実践Ⅰ「知らせたい出来事を新聞で伝えよう」で作成した新聞を読み合う活動を取り入れた。そこで、改めて構成の工夫（割り付けや見出し、写真の活用の仕方など）を確かめ合った。

図9は完成したリーフレットであるが、新聞作りに取り組んだ時のことを想起し、読み手にお薦めする理由が伝わるように、事例や写真の位置を検討したり、文章の内容に合わせた写真の使い方を考えたりする姿が見られた。



図9 授業実践Ⅱで児童が作成したリーフレット

② 授業実践Ⅱを終えて

授業実践Ⅱの後に、児童に「自分の好きな遊び」について述べる文章を書かせた。それを4月に書いた自己紹介の文章（主に自分の好きな物について述べたもの）と比べたところ、理由を表すときに使う言葉を使用して書いた児童の割合が41%から90%へと増えた。また、図10のように理由だけでなく例を挙げるときに使う言葉を使用して書いた児童もおり、「考え→理由（→事例）」と筋道を立てて説明する文章を書けるようになってきていることが分かった。



図10 同じ児童が4月（右）と11月（左）に書いた文章の比較

③ 意識調査の結果より

児童の「書くこと」の学習における意識の変容を捉えるために意識調査を実施した。

その結果、図11のように「文章をどのように書いたらいいか、分からないことがある」と回答した児童の割合は、4月に比べ約34ポイント減少した。また、「読む相手のことを考えて文章を書いている」と回答した児童の割合は約17ポイント増えている。これは、授業実践Ⅱで読み手を具体的に設定して学習活動に取り組ませたことで、意識の変容が見られたと考える。

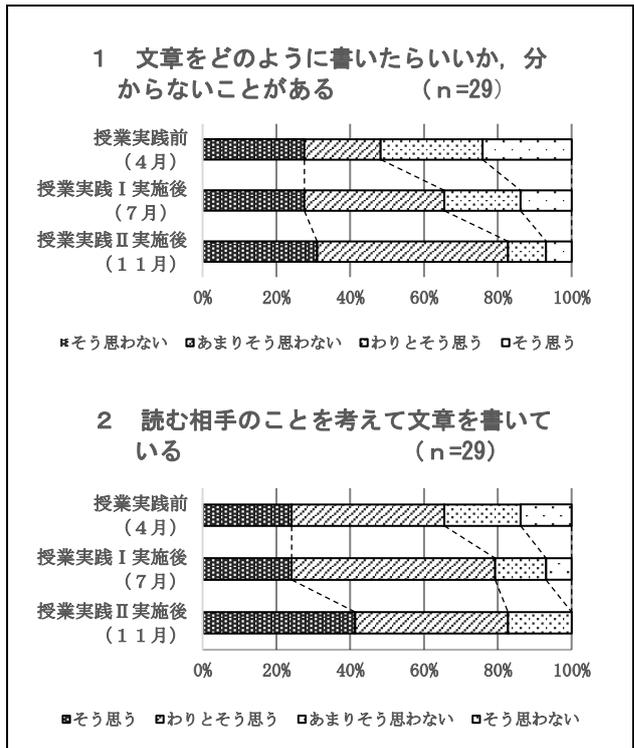


図11 意識調査の変容

(2) 研究の成果と課題 (○成果, ●課題)

① 読み手を意識した「書くこと」の指導の工夫

○ 児童の書いた文章には変容が見られ、相手や目的を意識して書くことができる児童が増えてきている。ワークシートの活用や例文の提示など、読む人のことを考えるための手立てを設け、伝えたいことの中心を明確にさせたり、文章の順序を意識させたりした成果があったと考える。

● 「書くこと」の学習で得た知識や技能が十分に定着していない児童も一部見られた。確実な定着を図るために、国語科やそれ以外の教科でも継続して書く機会を設けるなど、指導方法を検討していく必要があると感じた。

② ICTを活用した「書くこと」の指導の工夫

○ 記入したメモや下書き、清書した文章を撮影やスクリーンショットをしてデータ化することで、児童は自身の変容を捉えやすくなった。「自分が書いた文章を読み直している」という児童の割合も69%から83%に増えた。

● ICTを活用する場面について、学習のめあてや児童の活用能力に合わせて内容を精選する必要があった。活用しない場合と比較し、その有効性について今後も検証を重ねていきたい。

【図表等の許諾について】

図1～5, 7～10は授業実践の中で児童が記入したワークシートや文章の一部である。記入児童名を明記せずに掲載することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。